

## アドラーのケース・セミナー 神経症への道程\*

西忠徳 \*\* 訳

\*Adler,A. : Laying the Neurotic Foundations, in The Pattern of Life (1930).

\*\* 神戸家庭裁判所。家庭裁判所調査官（当時）

### 要旨

キーワード：

### 問題

今夜検討する事例について、事例提供者は、患者の行動は不可解であると言っています。しかし、私たちは私たちにできることをやってみなければなりません。可能な限り最も単純な方法で、患者の行動の謎を解いてゆきましょう。

レイチェルは12歳の女の子で、問題は不登校である。彼女は教室での勉強についてゆけないと言って、1929年5月現在、登校を拒否している。

この報告の最初のことばが既に、この子が劣等コンプレックスを持っていることを、かなりはっきりと示唆しています。しかしながら、劣等コンプレックスがあると推定するだけでは充分ではありません。すなわち、この具体的な問題を細部にわたるまで検討し、その上でこの子が自分の無能力感をうまく克服できるように、何らかの方法を工夫してあげなければなりません。

レイチェルが登校をしづめているということは、まわりに登校を強制しようとしている大人たちがいるということです。この子はその大人たちにむかって「ノー」と言っているのです。そうすることによって、この子は家庭内で、一種の主観的な優越感を手に入れているのです。レイチェルは常に問題児であった。彼女の目下の問題である登校拒否は、教室内での彼女の態度の延長線上にある。

「常に」ということばは大変強いことばですが、この子が生まれ落ちたその日からずっと問題児であり続けたとはちょっと信じられません。ある時、彼女が反抗しなければならぬ何事かがおこったのだと考えるほうがよいように思います。おそらくその不幸な出来事とは、弟か妹が生まれたということでしょう。

レイチェルは今年、つまり1929年の2月に専門科目を含む中学校に進学した。小学校時代には、彼女は自分の希望どおりに扱われて勉強してきた。中学校に入ると、レイチェルは教室で

泣き叫び、勉強が難しすぎてできないと言って登校拒否をはじめた。担任教師はもちろん、他の教師たちも彼女をなだめようとしたが、レイチェルは元いた小学校へ戻ると主張してゆずらなかつた。新しい環境下で自分の問題に直面するほうがよいと考えられたので、この彼女の主張は聞き入れられなかつた。

泣き叫ぶことは必要がなかつたようにも思えます。なぜなら、勉強についてゆけないとすれば、それだけで充分小学校に戻されることができたでしょうから。この子が泣き叫んだのは、単に小学校へ戻るためだけの目的ではなくて、クラスをかきまわして自分の無能力さに注目を集めるためだったと考えたほうが当たっていると思います。ある程度この子の反応は独創的なものです。この独創性から見て、この12歳で中学校へ入れるだけの知能のある女の子は、自分が教室で泣き叫べばどうということがおこるかを認識していたと考えてよいでしょう。誰かこの子の信頼を得ることができる人がいれば、その人はクラスの中での問題に直面するようこの子を勇気づけることができると私は確信します。

クラスの中で自分に課せられている要求に答えられないのではないかという怖れが、この子の反抗の真の理由であるとはちょっと考えられませんね。彼女は今まではいつも良い生徒でしたし、今の教師たちも彼女には親切だと思います。

—レイチェルは次に、中学校の中の程度の低いクラスに入れてもらえるなら、登校すると言いだした。

患者から「もし」ということばを聞いた時はいつでも、次に続くのは実現不可能な条件だぞと思ってかまいません。レイチェルが教室から出て行きたがり、あるいは自分をとりまく環境全体を怖れる本当の理由は、彼女には新しい状況に直面する勇気がないということであり、彼女は自分の無能力さを自慢げに見せびらかしています。そして彼女が勉強についてゆく能力がないと主張すればするほど、教師たちと両親はその反対を主張します。これは劣等感を優越感にすりかえる方法のひとつです。[このように自分の劣等性を誇示することで他者の注目を引き、そして主観的な優越感を手に入れる行動様式を、劣等コンプレックスと呼んでいます。]

—彼女は小学校にいた時と同じようなレベルのクラスに変えられたが、約束を守らなかつた。母親は小学校へ行って、レイチェルを戻してくれるように頼んだが、あっさりと断られた。次に父親がレイチェルを殴った。しかしレイチェルは登校を拒み続けた。そしてついに、教育委員会で聴問会がひらかれ、レイチェルはある病院の児童クリニックへつれてゆかれた。このクリニックでは、当分の間家にいることが許可された。

レイチェルをとりまく問題の環はひろがりつつあります。自分のケースがついには新聞に載ることになっても、この子は別に驚かないでしょう。この子はクリニックをも自分のわなに陥れることに成功しました。レイチェルに家にいることを許すのは、十分な治療ではありません。なぜなら彼女は、なお同じライフスタイルを持った同じ子どものままだからです。

—レイチェルはこの事例報告に関する質問に答えるために事例報告者の勤務している小学校へ来た。その時彼女は友だちにしたらしい少女をひとりつれてやって来た。この友だちの影響でレイチェルは登校する気になっていった。レイチェルはこの秋から登校することに決めた、ただし

レイチェルは、この友だちと同じクラスにしてもらえるのなら、と条件をつけた。この条件はしかし拒絶された。今レイチェルが気に病んでいることは、この友だちが来月、つまり6月には進級してしまうだろうことである。そうなれば、レイチェルは永久にこの子と同じクラスになることはできない。

友だちについて来てほしいと思うことや、学校へ行く決心を先にのぼすことは、すべて劣等感の特徴です。こういうタイプの個人が外出恐怖症と呼ばれる神経症になってゆくのです。外出恐怖症というのは、保護と介助とをたえず要求し続ける神経症です。この子は自分の出す条件を巧妙に工夫して、自分の目標をしっかりと維持し続け、教師や医者や両親を解決不能の状況に陥れます。レイチェルは支配者なのです。

—レイチェルは、登校拒否を続けている間に、とてもおとなしいとは言えない性格になってしまったが、時々臆病そうな様子を見せた。彼女はたびたび大変粗野に無礼にふるまった。

この興味深い事実から、この子は支配的なタイプで、他者と争うことを決して辞さないだろうという私の感じは確認されました。彼女がただひとつ怖れることは、ひとりで新しい状況に直面することなのです。

—小さいころ、彼女の行動には全く問題は無かった。ところが、1年半前、まだ小学生であったころ学校で先生が彼女の成績を酷評したことがあった。

ね、おわかりでしょう。この子が「常に」問題児だったという言いかたは修正しなければいけません。あきらかに、レイチェルは、理想的な仮想の優越目標を追求しています。彼女は神の役割を演じようとしているのです。この役割を演じとげるためには、彼女は誤ちをれさない、支配的な人間でなければなりません。ところがこれがうまくできなくなった時、彼女は何らかの役割を演じること自体を完全に拒否してしまったのです。

—この時点ではじめて、彼女は現在と同じ症状を訴えた。彼女は勉強についてゆけないと言い張り、家族の反対にもかかわらず時々学校を欠席した。その理由を彼女は、恐いし準備ができていないからだと言った。全般的健康状態のため、という理由で、彼女は家に居ることが許された。最近になって、レイチェルは、症状を出す6ヵ月前からずっとこの教師に憎しみをいただいていたことをうちあげた。

この6ヵ月という日々は非常に重要です。なぜならこれは、この子の神経症行動の準備期間だったからです。神経症は夜のうちに作られるものではありません。時間をかけて育てられて後ではじめて、それは花開くのです。

—それ以前の1927年2月、彼女は進級したが、新しいクラスでは学級委員にしてもらえなかった。前のクラスでは学級委員だったのである。これは担任が変わったためであった。しかしこの時点では、彼女は自分の感情を隠していて、担任は彼女の憎しみを考えてもみもしなかったし、彼女に何の問題も見出さなかった。問題は6ヵ月後にはじまった。しばらくの間、彼女は自宅にいて登校しなかった。これが第1回の登校拒否である。昨年、つまり彼女はふたたび学校へ行くようになり、進度の遅いクラスに入れられた。このクラスの担任はこういう子どもたちを扱った

経験が豊かであり、同情的であった。レイチェルはこのクラスに1年いたが、その間に勉強に興味を持ちはじめ、また臆病さを克服していったように見えた。彼女はグループ活動にも参加するようすすめられ、楽しそうに独唱してみせるほどになった。レイチェルがクラスになじんで後、時々以前の臆病さとは正反対の態度を見せることがあった。ある時、レイチェルが担任教師にあげようと思って裁縫していたのに、教師がそれに気付かなかったことがあったが、その時彼女はひどく生意気な態度をとった。

気に入った状況下では、この子が簡単に全行動パターンを変えることができるのがおわかりになるでしょう。

## 家族布置

一両親は健在である。同胞は19歳の姉、17歳の兄、12歳のレイチェル、7歳の妹、5歳の弟である。

レイチェルはすぐ上の兄より5歳年下であることがわかりました。上とかなりの年齢差がありますので、彼女は中間子に加えて、長子に似た状況にあります。妹は5歳年下で、弟は7歳年下です。妹の誕生によって、レイチェルは末子という家族の注目の中心であった位置から強制退位をさせられました。

一父親が一家を支配している。一時期、長男が父親のお気に入りであった。母親は特にどの子を気に入っているというわけではなかった。子どもたちが大きくなってくると母親は子どもたち全員と衝突した。

たぶん母親は、子どもたちがまだ小さくて、子どもたちが望むものを与えることができた間は、彼らとうまくやってゆけていたのでしょう。子どもたちが大きくなって、もうそうはゆかなくなると、彼らは手に負えなくなってきました。おそらくレイチェルは病弱だったのではないかと思います。それで並はずれて甘やかされたのでしょう。

子どもたちはお互いにいじめあうことはなかったが、レイチェルは『みにくいアヒルの子』のようであった。『みにくいあひるの子』というのはたぶん、彼女が短気でわがままなことを言っているのでしょうね。どうも彼女が他の兄弟の間にもめごとをおこさせているように思えてなりません。

一兄は爪かみの癖がある。兄が爪をかんでいるのを見ると、レイチェルはひどく興奮して金切り声をあげる。兄はレイチェルが神経質なことはわかっているが、爪をかむのはやめようとしな。母親は、このような状況の中でなす術がないようである。

一番上の姉はレイチェルに大変よくしてやり、母親的な役割を引き受けている。彼女はレイチェルに服を作ってやったこともあるし、映画につれて行ってやったこともある。レイチェルは姉が自分によくしてくれるので感謝しているようである。

妹はレイチェルの言うことをよく聞くので、レイチェルは妹にはやさしいし、よく遊んでやる。妹だけではなく、家族の全員がレイチェルの言うことを聞いている。

レイチェルのライフスタイルに関する私たちの考えはさらに確かになりました。彼女は家族全体を支配しています。思うとおりにならないと、この子は金切り声をあげるのです。

## 生育歴

—父親と長女とが働いている。家には5部屋あり、レイチェルは姉と寝ている。

レイチェルは正常産で生まれ、3ヶ月間母乳で育てられた。離乳に際して胃の障害がはじまった。彼女はクル病だと思われていた。生後3年間のうちの数ヶ月、彼女は心臓が悪くて、毎週一回大学病院の外来につれてゆかれていた。10歳の時、心臓病のため、短期間臥床生活をおくったことがあった。彼女はずっと胃の具合が悪かったが、今はややよくなっている。電車に乗る時以外には吐いたことはない。

〔やはり器官劣等性がありました。〕この子は病気のために、おそらくあらゆる気まぐれが許されたのしょう。そこで、この幸福な状態を永遠に続かせるために、彼女は自分の病弱さを利用することを学んだのです。このことの一例が電車に対する反応です。電車を思いどおりに扱うことはできなきので、彼女はいら立って、そのいら立ちを自分の劣等器官である胃腸を使って表現しています。これは外出恐怖症の初期症状かもしれません。

—彼女は家では食べるのをいやがり、近所の家で食べさせてもらうのが好きである。

ここでもまた弱い胃がものを言っています。今度は母親への非難をこめて。

—家庭の食事はあまりおいしくないのかもしれない。事例提供者が訪宅した時に見た昼食は、鮭のカン詰を皿にもったものであった。繊細な子どもであれば、これではちょっと気に入るまいと思われた。妹はレイチェルを見習ってか、家で食べるのをしぶっている。

この家庭では〔家族価値が「食べること」で〕食べることが強調されすぎているという可能性もありますね。子どもたちはそこに目をつけて、食べないことで母親を攻撃しているのかもしれませんがよ。

—レイチェルは生後13ヵ月で歩き、同じころ喋りはじめた。1歳半の時、彼女は扁桃腺摘出手術を受けた。彼女は大変早い時期に麻疹にかかった。レイチェルは幼児期には人見知りがひどく、怖いとすぐに金切り声で泣いたと母親は言っている。母親によると、レイチェルは清潔好きでいつも小ぎれいにしている。登校する時も小ぎれいにしていて、登校の時間にもきちょうめんで、字も大変きちんと書く。

ちょうど幼児期に恐怖心を有効に利用したのと同じように、レイチェルは学校では自分にとって快適な状況を維持させるために小ぎれいに変身したのです。

—彼女は家族の願いには無関心で、学校へは行きたがらない。小学校の最後の学期には学校では他の子どもたちと大変仲良くすごし、他の問題児に同情を示すほどであった。

この彼女の他者への関心は「私は問題児ではない」ということです。

—レイチェルは小学校の最後の学期の間、同じクラスにいたモリーという子とよく遊んだ。モリーは 12 歳くらいの子で、レイチェルほどは成績がよくない、どちらかというとな静かな少女であり、リーダーのタイプではない。

レイチェルはあきらかにモリーを支配することに成功しました。さもなければ、この二人の友情は続かなかっただでしょう。

—レイチェルはゲームをしないが映画は見にゆく。彼女が好む本や話は妖精物語であった。

映画を見るのに共同体感覚はいりません。子どもは映画の主人公に同一化することで、安易に重要人物になったような感じを手に入れられます。ゲームの中での競争は、自分ひとりを頼みとしなければなりませんし、つらいこともありますので、この子はしないのです。

—現在彼女は登校する気がない。食事も菓も拒否している。

ある日、母親が妹にソックスを買ってきた。そのソックスはレイチェルのサイズではなかったが、彼女は大変それが気に入ってしまい、父親が外出している間に、むりやりにそれをはいてしまった。

父親はあきらかに家庭の中での権力者ですが、父親が家を出たとたん、レイチェルが支配者になります。

—他の子どもたちはレイチェルの状態を知っていて、彼女の要求に折れて従う。彼らは思いやりがあって、レイチェルに親切である。レイチェルは、小学校の最後のクラスでは、申し分なく暮らしていた。そこでは彼女はやや甘やかされ気味であった。教師は、レイチェルは課題ができない時には恐怖心を見せると報告している。ある時、彼女があることを怖がったことがあったが、その時彼女は泣き叫び、両手を口の所へ持って行って神経質にひきつけていた。教師は彼女をなぐさめ、自分の机の側に留めて、クラスの生徒たちに、彼女をそっとしておくように言った。

恐怖心はこの子の最大の武器です。恐怖心を使って、彼女は周囲をコントロールできるのです。

—彼女は、小学校の最終学年のはじめにはさまざまな問題をかかえていたが、その学年の後半になると他の子どもたちと変わらなくなり、大変よく適応しているように見えた。

レイチェルは、欲しいものが得られている時には何ら問題をおこさないということは全くあきらまかです。

## 早期回想と夢

—レイチェルの最初の早期回想は、3歳の時、姉のメアリーが友だちからもらったローラー・スケートを持っていて、レイチェルはそれを使わせてほしかったが、使わせてもらえなかった、

というものです。

ソックスであれローラー・スケートであれ、それはたいした違いはありません。レイチェルは、自分が持っていないものを他の子どもが持っているという事実到我慢ならないのです。

—最近彼女は夢を見た。彼女は家にいて、暗くてこわそうに見える地下室のドアをくぐらなければならなかった。彼女は家を出るのがこわかった。というのは、その地下室のドアをくぐらないと外へ出られなかったのだ。母親はねむっていた。子どもたちは起こすと言われていた。何人かの友だちが家の中にいて、子どもたちはその子たちを静かにさせておくことができなかった。彼らは母親を起こしてしまった。母親はベッドからおりて、ハンマーを持って彼らの方へやってきた。レイチェルは弟と妹をつれてきてかばってやった。そして、外へむかってかけ出しおそろしいドアを通りぬけた、ドアから声がきこえてきた。「もどきなさい。あの人はお前を傷つけはしない」そこで彼女はほっとして目がさめた。この夢は、レイチェルが家を離れることに対して、どのような感情的身がまえを必要としているかをあざやかに示しています。これは外出恐怖症の初期に見られるもうひとつの症状です。

この夢は、彼女はドアを、それは危険を意味しているのですが、巨大なおびやかしがある場合にのみ通過するということを意味しています。しかし、ドアそれ自身から声がきこえてきて、母親のおどしを余り深刻にとらないようにと言います。つまり、「たとえ不快であろうとも、家に居なさい。家の中では本当に大変なことは何もおこらない」と夢は言っているのです。

—彼女の望みはタイピストになることで、彼女の怖がるものは有色人種である。

黒人がほとんどいないウィーンでは、有色人種恐怖には余り価値がありませんが、アメリカではそれは不安を作り出すとてもよい方法です。通りへ出られない立派な理由になりますから。

事例提供者のまとめは以下の如くである。レイチェルは甘やかされて育ち、自分の病弱さを、他者に自分の意志な押しつけるために使った。彼女は自分の弱さを顕示することによって権力を手に入れようとしている。彼女の夢は、彼女が弟や妹に対して保護の感覚を持っていることを示すが、それは、弟や妹は両親のように彼女を支配することがないからである。タイピストになりたいという彼女の望みは、彼女がうまくできると自信のある一定の線にそって自分を表現すること、つまり作文、への望みを示しているのかもしれない。彼女の学校での問題は、大部分不得手な算数に関係しているのである。ここに見られる限りでは、この報告をした教師は、レイチェルの状況について実にうまくまとめています。母親と話しあって、もういくつかのことがわかりました。レイチェルが中学へ進学した最初の日、教師はレイチェルに黒板に文を書かせましたが、彼女は書けませんでした。彼女は泣きだし、教師は、「バカ。席にもどきなさい」と言いました。レイチェルは家へ帰って、「お母さん、私、学校へ行きたくない。先生が悪いから、もう行かない」と言いました。この時から彼女は中学校への登校を拒否するようになってしまいました。

## 面接

(子どもと母親入室)

アドラー：お入りになってかけてください。今日は。ここは気に入った？学校みたい？

レイチェル：はい。

アドラー：この室のみんなが君を好きだし、君のことを見ている。うれしいかい？

レイチェル：はい。

アドラー：私は思うんだけど、どこにいても君は、君自身のやりかたで物事をはこぶことにちょっとこだわりすぎるんじゃないかな。みんなの注目を集められそうにないと思う場所があったとしたら、そこへ行かないで、行けない言いわけをしようとするだろう。通りへ出てないでおこうとして、黒人がこわいって言いわけをするように。いつもいつも世界中の注目を集め続けていることは誰にもできない。けれど、もし君が他の人に親切で役に立ってあげれば、誰もが君のことを好きになるよ。君の先生は、君に「バカ」って言ったんだってね。でも、それは違っているね。君がとてもかしこい子であることは、私はよく知っていますよ。私の先生たちも、私はものすごいバカだとよく言ったものだけれど、私は笑いとぼしてやったよ。学校の勉強は誰にだってできるし、君もできる。それは我々みんなが知っているよ。けれど、黒人がこわいと言ってずっと家に居るんだったら、結局のところ君はあまりかしこくなかったんじゃないかなあと考えはじめちゃうかもしれないよ。もし私が君なら、まずお父さんと仲良くなるね。お父さんはきっと君が大好きだと思う。君が御両親を好きだということを御両親が知ったら、君が自分は家族の中で一番えらいんだと見せるためにどんなトリックを使った時よりももっとずっと、御両親は君のことが好きになると思うよ。良い生徒になりたい？

レイチェル：はい。

アドラー：もし君がやる気になれば、一週間でできると思うよ。私に手紙を書いて、君がどういう暮らしをしているか教えてくれないか？

(レイチェルと母親退室)

アドラー：私は母親と子どもがどの程度私の言うことを理解できたかわかりません。しかし、私が何をしようとしたかは、皆さんはわかってくださっていると思います。レイチェルと親しい人が、彼女のしているトリックをもっと徹底的に彼女に説明し、それを断念するよう彼女を勇気づけるように望みます。あの子は父親や教師におさえつけられていると感じていればいるほど、家庭や学校を独裁的に支配したいと望むようになることはあきらかです。彼女の目標の空虚さにみずから気付いた時、彼女はなおるのです。教師の協力があれば、この事例の予後は良いと思います。

(次に示すのは、一週間後に子どもから受けとった手紙である。)

親愛なるアドラー先生。

今週はまったく違った一週間でした。私は一日中外に出ていました。先生の所へ行ったので良くなったのだと思います。X先生は、もしアドラー先生がいいとおっしゃるなら、X先生の学校で私が小さな子どもたちを教えてみるのは良い考えだろうと考えておられます。私は秘書室へ入りました。この手紙を書くために。これはタイプライターで書いたはじめての手紙です。

敬具

レイチェル

1929年5月22日

## 更新履歴

2012年6月1日 アドレリアン掲載号より転載